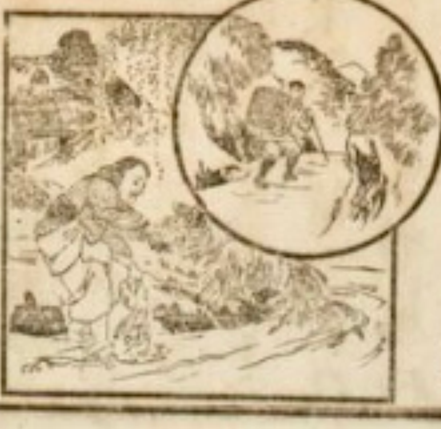
トラフレハ、タヾチ ニ コロシテ、シヨク
モツ ト ナズ。
ソノ チカラ ハ、ハナハダ ツヨク、タヾ
ヒトウチ ニテ、ヨク ウシ ヤ、ウマ ノ
セボネ ヲ クダキ、コレ ヲ ハコビサル
コト、ネコ ノ ネズミ ヲ トラフル ニ
ヒトシ。
ソノ ホユル コヱ ハ、シヅ ニ スサマジク
シテ、ヤマ ヨリ ヤマ ニ ヒヾキ、ホカ ノ
ケモノ ハ、コレ ヲ キヽテ、ミナ フル
ヒ オソルメ ト イフ。

第十課　桃太郎　(一)

昔 ある ところ に、ぢゞ と、ばゞ と 住
めり。一日、ぢゞ は、山 に 草刈 に 行
き、ばゞ は、川 に せんたく に 行きた
るに、川上 より、一つ の 大なる 桃 が

がれ來れり。ばゞは、家に 持ちかへり、ぢゞの かへるを 待ちて、之を わりたるに、其の 中より、一人 の 男の子、生れ出でたり。二人 は、おどろき よろこびて、此の



子を 桃太郎 と 名づけ、心 をつくして、大切 に そだてけり。

桃太郎 は、成長 する に したがひ、力 つよく、ちゑ 人 に まさり ければ、ぢゞ ばゞ の よろこび、たとへんかた なく、桃太郎 の いふ こと は、なにごと も 之 に したがへり。

ある 日、桃太郎 は、ぢゞ と、ばゞ と に

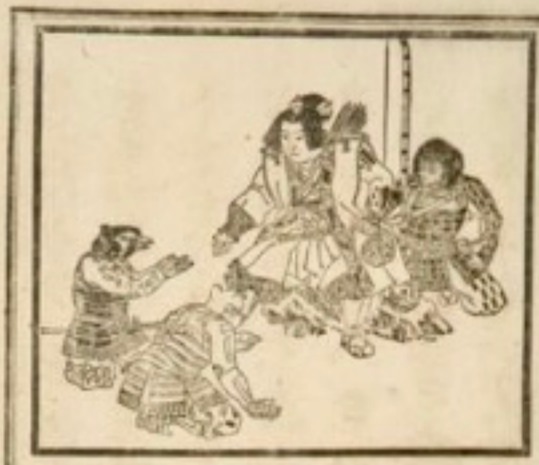
向ひ、「此の ころ、鬼ケ島 に、鬼ども あまた うちよりて、人を くるしめ、たから物 を かすむる やうす ゆゑ、之を 征伐 したし」、と まうし出でたり。

昔。住。持。待。男。鬼ケ島。
征伐。

第十一課 桃太郎 (二)

ぢゞ と、ばゞ とは、桃太郎 が いさましき ねがひ を ゆるし、ひやうらう に とて、たくさん の きびだんご を つくりて、あたへたり。桃太郎 は、之 を おしいたゞき、こし に つけて、ひとり、鬼ケ島 へ と いそぎけり。

道 に て、一匹 の 猿、出で來り、「桃太郎 さま に は、どこ に おいで あそばし ますか、又、おこし の もの は、何 で



ござりますか」、と問へり。桃太郎は、「鬼ケ島へ征伐に行く所である、こしにつけたるは、日本一のきびだんごなり」、と答へたり。猿は、「其のだんご一つたまはらば、御供仕らん」、と申しければ、桃太郎は、之をあたへて、供にめしつれたり。

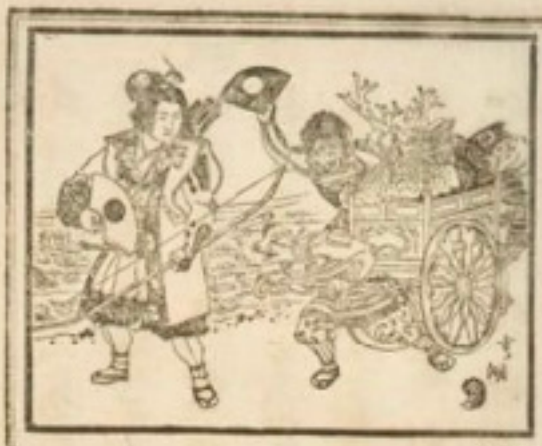
しばらく行きしに、一匹の犬かけ来り、「日本一のきびだんご一つ下さらば、御供いたさん」、といふ。其のところに、きじも、亦、とび来りて、「それ下さらば、私も御供仕らん」、といふ。桃

太郎は、此の犬と、きじとに、だんご一つづゝ、を、あたへて、供につれ行けり。

匹。猿。所。仕。申。亦。

第十二課　桃太郎（三）

程なく、鬼ケ島へつきけるに、門固くして、入ることかなはねば、桃太郎、力をこめて、之をおしやぶり、内にかけ入れば、鬼ども、あまた出できたりて、桃太郎にうちかゝれり。桃太郎は、猿、犬、雉子と力を合せ、あたるをさいはひ、なぎたつれば、鬼どもは、或はきられ、或はうたれ、のこりし者も、大方はかうさんせり。今はせんかたなく、さすが鬼の大王も、つひに、桃太郎の



手に おさへられたり。

桃太郎 は、鬼の いはやを あらためて、色々の たから物を をさめ、之を 車に のせ、猿、犬、雉子 どもに ひかせて、家に かへり、ぢゞばゞへの みやげと せり。

程。固。雉子。或。者。大王。車。

第十三課　雪の朝

昨夜 より、ふり出したる 雪は、今朝に なりても、なほ 止まざれば、どこ もかも、まつ白 に なれり。

正一 は、此の 朝、妹の おしげ と 共に、早く 起き出でゝ、雪の けしき を

こゝを學び、家にかへりては、よく父母につかふるに在り。若し、之を怠る者あらば、蜂や、鳥にもおとるぞと云ふべし。

蜂。終日。香。用意。守。怠。爲。云。

尋常小學讀書教本巻四終

明治廿七年十二月廿六日
文部省檢定濟

明治二十七年十一月十二日印刷
同　年十一月十六日發行
明治二十七年十二月十九日訂正再版印刷
同　年十二月廿二日發行

定價金			
巻一、五錢五厘	巻二、六錢	巻三、七錢	巻四、八錢
巻五、八錢	巻六、九錢	巻七、九錢五厘	巻八、拾錢

版權所有

編者　東京小石川區[illegible]江戸川町壹番地　今泉定介

編者　東京本郷區森川町[illegible]　須永和三郎

發行者兼印刷者　東京神田區[illegible]十四番地　辻太

發行所兼印刷所　東京神田區[illegible]十四番地　普及舍